

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★



Data

監督: 孫周 (スン・チョウ)
出演: 鞏俐 (コン・リー) / 高忻 (ガオ・シン)

👁️👁️ みどころ

鞏俐 (コン・リー) が聴覚障害をもつ子供の母親となって大奮闘! 子供と一緒にいる時間を確保するため、路上での雑誌売り、新聞配達員、家政婦業と何でも……。女は弱い、されど「母は強し」の典型と思っただが、やっぱり女の弱さも……。ちょっと異色の鞏俐主演作だが、ほのほのとした気持ちになること確実な秀作!

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<孫周監督と鞏俐>

孫周 (スン・チョウ) 監督と鞏俐 (コン・リー) との出会いは、張凱歌 (チェン・カイコー) 監督の『始皇帝暗殺』(98年) での共演から。すなわち、孫周が、始皇帝の若き日の政や鞏俐扮する趙姫と幼なじみの燕の太子の丹を演じたこと。この撮影中に、鞏俐と検討を続けた結果、『きれいなおかあさん』の完成に結びついたということだ。『きれいなおかあさん』は、国家の承認を得るために20回にも及ぶ手直しを加えたのち、ベルリン映画祭で初上映を飾り、ここで金鷄賞を受けた他モントリオール映画祭で鞏俐は、その後最優秀主演女優賞を受賞した。これに気をよくした(?) 孫周と鞏俐は同じコンビで、第2弾となる『たまゆらの女』(03年) を発表し、『きれいなおかあさん』とは、全く異なる鞏俐の女性としての魅力をいっぱいひき出した。『きれいなおかあさん』は確かに泣かせるいい映画だが、スケベ親父の私としては、どちらかといえば、『たまゆらの女』の方がスキ……?

<聴覚障害と言葉の学習>

映画の冒頭、鄭大 (ガオ・シン) の母親の孫麗英 (鞏俐) が、鄭大に対して言葉の訓練

をしている場面が登場する。その方法は、大きく息を吸っては吐かせることによって、天井から垂らした紙を動かしたり、発音を覚えさせるため、大きく口を動かさせながらア、エ、イ・・・と母音の発音を訓練するもの。

聴覚障害の子供に言葉を覚えさせ、しゃべらせるのがどれくらい大変なことなのか私にはよくわからないが、この映画では、少なくとも鄭大が小学校に入る手前までは、孫麗英が女手ひとつで何とかこの訓練を続け、それなりに成功させてきたことがわかる。そのため、鄭大はしゃべることに多少の苦労はあるものの、それ以外は、健常者に劣るものはない！と自信をもって孫麗英は言えるわけだ。

<小学校入学は？>

しかし、聴覚障害者の普通の小学校への入学は、かなり困難を伴う様子。校長の前でしゃべる試験を受けた鄭大は、一生懸命頑張ったものの、やはり結果はダメ。校長は、聾啞学校への入学をすすめるが、孫麗英は鄭大のためには絶対普通の小学校がいいと信じている。だって、聴覚以外は何も障害がないのだから。「補聴器をつけていることと、メガネをかけていることとどう違うの？」と真正面から問われると、容易に答えられないはずだ。

実は、私もケースこそ違え、同じような問題で悩んだことがあるが、障害をもつ子供と健常者の子供とを共存させるべきか、それとも区別（差別）させるべきかは、すごく難しい問題・・・。

<母親は強し！>

孫麗英が鄭大を女手一つで育てているのは、タクシー運転手をしている夫と離婚したため。その家庭事情は深くは描かれていないが、何とか養育費だけは払ってくれている様子。しかし、たまに父親に会わせると、ケンカを教えたり、ロクなことはない！

鞏俐扮するこの孫麗英という母親は強い。今勤めている工場の中で、「よく働くので主任にしてあげる」と言われても、小学校に入学できなかったのは、自分と接する時間が少なかったためだと反省した孫麗英は、子供と一緒にいる時間を確保できる仕事を探すため、これを受けず、会社を退職。

孫麗英が最初にやったのは、同級生の女友達から紹介された路店での雑誌売り。そして、これが無断営業で取締りを受けると、今度は家政婦や新聞配達の仕事を。中古の三輪自転車を購入して、荷台に乗る鄭大に言葉の勉強をさせながら、北京の天安門広場を疾走する孫麗英のたくましさには、ただ感心するばかり・・・。

<補聴器の値段は？>

鄭大は男の子。したがって、小学校入学の年頃ともなると、ケンカすることもある。まして、聴覚障害というハンディキャップをもつ鄭大は、イジメにあうことも。そんな時、

立ち向かっていくのが男の子・・・！しかし、ケンカにまきこまれたことによって、鄭大の耳につけていた補聴器が壊れてしまったから大変。孫麗英はケンカをした鄭大を怒りつけ、ケンカを教えた父親をなじるけれども、そりゃ仕方ないヨ・・・。

ここで現実問題は、中国では補聴器の値段が5000元（約7万円）もすること。新聞配達や家政婦の稼ぎでは、とても手が出ない金額。そのためしばらくは、補聴器もないまま不自由な生活と不自由な言葉の勉強を余儀なくされることに・・・。

<揺れ動く女心>

ある日、孫麗英の家を訪れてきたのは、小学校の先生のA氏。彼は、鄭大が入学できなかったため落胆しているだろうと気をつかってくれた校長先生から、孫麗英を元気づけるために訪問してきたわけだ。その気遣いに感謝しながらも、来年に向けてまた頑張ると微笑む孫麗英。あくまで、孫麗英の気持は前向きだ。

その後、鄭大を連れて新聞配達に回っていた時、偶然出会ったのがこのA。鄭大に対してもやさしく接し、言葉を教えてくれるA氏に対して、孫麗英が好意をもったのは当然。離婚した夫と比べれば、その違いは歴然！他方、A氏も、自分は何の力もないが、家政婦の紹介などできることは何でもと、やさしい言葉を・・・。親としては強い孫麗英であっても、鄭大とケンカしてみじめになった時などには、たまに「女」に戻ることも・・・？

後述の、あのにくたらしい家政婦の雇い主のオッサンともみあい、そのカネで補聴器を買った孫麗英は、やさしく鄭大に対して絵を教えてくれていたこのA氏の家に飛び込んだが・・・？

<とんでもないスケベ親父>

孫麗英が家政婦として紹介された店（家）の主人は、何をしている人物かよくわからないが、格別悪人風ではなかった。だから、孫麗英は普通に仕事をしていればよかった。しかし、今朝家の中に入ると、徹夜マージャンの後だろう。部屋の中は散らかり、マージャン台の上には多額の現金がバラまかれたまま。

そんな中、起き出してきた主人は、眠そうに目をこすりながら、うだうだとぜいたくなグチ話を・・・。孫麗英がテキパキと仕事をこなしながら、これに対応していたところ、この主人は急に孫麗英に対して、「仕事はいいから、ここに座って。給料はちゃんと払うから」とソファーに座るようすすめてきた。何となく変な雰囲気・・・。そう思っていると案の定、この主人は急に孫麗英の手を握ってきたばかりか、これをはねのけようとした孫麗英を抱きしめ、さらに無理矢理・・・？

<思わず心配したが・・・？>

このシーンが途中で切れた後、スクリーンは突然、顔にキズをつけた孫麗英が、血相を

変えてあの補聴器を売っている店の中に飛び込み、5000元をたたきつけながら、補聴器を買うシーンに変わる。一体これは・・・？孫麗英の身に何があったのか・・・？

さらに次のシーンは、購入したばかりの補聴器をもった孫麗英が、鄭大が絵を教えてもらっているAの家に入り、鄭大に補聴器をつけようとするシーン。顔にキズをつけ、血を流している孫麗英を見て、事態(?)を把握したかのように、やさしくその手当をするA。一体あの「事件」で、孫麗英はどうなったのだろう？映画の観客としても、そしてまた、鞏俐ファンの私としても(?)、思わず心配したが・・・？

<私にもタメになる中国語のお勉強>

中国語には、無気音と有気音、けん舌音と舌歯音、さらに舌後音と舌前音等がある。また、第一声から第四声まで、中国語独特のイントネーションがあり、それがすごく難しい。また、子音が全部で21ある他、母音も日本語のアイウエオの5つの他、ユイというのがあり、全部で6つ。

このように中国語は、発音とイントネーションが難しいが、その反面、日本語と同じ漢字も多いし、よく似た発音があるだけ、ハングル文字の韓国語よりは、よほど覚えやすい(?)。

映画の中で、孫麗英が鄭大に対し、ホア(花)と発音させようとするが、鄭大はそれがなかなかできず、その発音は、ファー(発)となってしまう。もっとも、何回やってもできなかったものが、たまたま鄭大が自分で花を摘んできた時、これを見ながらホア(花)と発音できるようになったのを見ると、一定の訓練を経れば、ある時点で急にできるようになることもあるようだ。

最近、少しだけ中国語を勉強している(?)私にも、この映画での中国語の学習法は、大いに参考になるもの・・・。

<これからが大変！>

この映画はちょうど90分だから、長い作品ではないし、テーマはシンプル。とにかく、鄭大を普通の小学校に入学させるべく必死で生活をしながら、鄭大の言葉の学習に精を出す孫麗英の姿を淡々と(?)描くだけ。しかし、当然そこにはさまざまなハプニングもあるし、大変な事件もおこってくる。したがって、それを描くだけで十分感動的なドラマになるわけだ。

しかし、この映画が描いた孫麗英と鄭大との二人三脚の生き方は、所詮、ほんの一瞬だけのもの。つまり、小学校に入る直前の鄭大とそれを支える孫麗英の姿だけだ。

しかし、実は大変なのはこれから。10歳から15、6歳になり、反抗期ともなれば、男の子はそりゃ母親のおえないこともいろいろあるはず。そのうえ、いくら聴覚障害があっても、色気づいてくるのも当然。そんな時、母親の孫麗英は、1人だけでこれに適

切に対応できるのだろうか？ここまではたしかに孫麗英はよく二人三脚で頑張った。でも、本当に大変なのはこれからだ。頑張れ、孫麗英！そして、頑張れ、鞆俐！

2004（平成16）年7月14日記